浅草の歴史

東京の都心部の北東部、台東区にある象徴的な浅草は、世界的に有名な寺社の所在地であるだけではありません。浅草は、浅草を故郷とする人々や、浅草の地理が偶然組み合わさったことにより何百年もの時間を経て発展してきました。

浅草の起源は、江戸の町（現在の東京）が存在する前の飛鳥時代（552年 - 645年）まで約1,400年遡ります。ある伝説によると、628年に檜前浜成・竹成兄弟が隅田川で漁をしていたところ、網の中に金色の像を見つけました。二人は町に帰ってこの像を村の賢人の土師中知に見せたところ、この像が仏教における哀れみの女神、観音菩薩を描写したものだとなりました。この像の神性に感銘を受けた中知は、自らの家を改装し、この像を祀るための寺を建てました。この出来事が浅草寺のつつましやかな始まりだと考えられています。今日の参拝者が目にする広大な境内は、平安時代（794年 - 1185年）にこの地域を治めた平公雅が942年に創建したものです。

観音像の発見と、浅草寺の創建により浅草は宗教的に重要な場所となりましたが、この地域が本当に栄えるようになったのは江戸時代（1603年 - 1867年）になってからでした。初代将軍徳川家康（1543年 - 1616年）が江戸を日本の首都に制定したことで始まった経済的および文化的な繁栄を遂げた平和な時代には、江戸の人口が急増しました。これにより、特に、将軍の庇護を受けるようになってからは、参拝客が常に浅草寺へと押し寄せるようになりました。

浅草寺で清掃などの作業を行った地元民は、浅草寺の参道で開店し、参拝客らに商品を販売できる特別許可が与えられました。これらの店は、近所の問屋から仕入れた玩具や土産物や、それに甘味やその他の軽食を売っていました。仲見世はこのようにして始まったのです。

江戸の遊郭、吉原の歓楽街は、1657年の明暦の大火で当初の所在地が焼失した後に浅草に移転しました。また、江戸の歌舞伎街、猿若三座も、浅草に移転し、浅草は娯楽の中心地として栄えるようになりました。浅草寺の裏（浅草寺裏とも浅草奥山とも呼ばれています）は、浅草寺に参拝する巡礼者が常に訪れていた以外にも、多くの訪問客を集めるようになりました。

様々な演芸場や、日本初の映画館の所在地となった六区（「6番目の地域」という意味）のある浅草は、20世紀になっても娯楽の中心地としての評判を維持し続けています。

浅草は、数世紀の間に何度も火事で焼失し、また第二次世界大戦中に焼夷弾で破壊されたにもかかわらずその不朽の評判と、地域をとっても誇りにしている住民の不撓不屈の精神で常に立ち直ってきました。浅草寺は現在では毎年約3,000万人の参拝客が訪れ、またこの地区では多数の有名な祭を開催しています。浅草神社の三社祭は東京の「三大祭」のひとつとされており、毎年奥浅草で開催される酉の市は、酉の市の中でも最大級のもののひとつです。浅草でも隅田川の西岸に面する部分は、春には花見の

名所であり、また夏には東京屈指の花火大会を楽しむのに格好のスポットとなります。

今日、浅草は、中心エリアの浅草、浅草寺の南にある浅草みなみ、そして浅草寺の北にある奥浅草の 3つの地域に分かれています。地域にはそれぞれ独自の特徴がありますが、訪問者は浅草のどこに行こうとも歴史の痕跡をはっきりと見ることはできません。